

沖縄の生徒のパフォーマンスと学力の関連性

琉球大学 西本裕輝

はじめに―本研究の背景

沖縄県における低学力が問題として指摘されて久しい。それは沖縄が本土復帰した一九七二年当初から指摘され続けてきた。しかしながら、県外との学力格差は、以前より縮小してきているとはいえ、未だ存在すると言わざるをえない。

沖縄県で行われている学力テストでは、いずれの学校段階においても県外に比べて得点が軒並み低いという結果が報告されている（沖縄県教育委員会 一九九七）。またそれに関連して、大学・短大への進学率が全国最下位（全国平均四五・一％、県平均二九・八％、ちなみに女性の大学・短大への進学率は、全国平均四七・六％、県平均三三・一％で全国最下位）、高校進学率も全国最下位、高校中退率が全国一位、低進学率がもたらす低学歴の間

題とも関連するであろうが、失業率もまた全国一位である（沖縄県対米請求権事業協会 2001）。このように沖縄は、全国的に見ても低学力問題を抱えている地域と言える。

さらにもう一つの側面であるが、近年、全国的な「学力低下」現象に注目が集まっている。これは周知のように、岡部恒治らの著書「分数ができない大学生」の問題提起に端を発し、社会問題化され始め、二〇〇二年度から新学習指導要領により学習内容が三割削減されるなどの教育改革がスタートしたことにより、その議論にさらに拍車がかかった。

今回の教育改革に対しては以前から批判も根強く、特に子どもたちの「学力低下」を危惧する声が高まり、荻谷剛彦をはじめとした多くの学者もこの問題について積極的に発言を行った（例えば、荻谷 2001a, 耳塚他 2002,

西村 2001)。文部科学省は当初は学力低下を示すデータは存在しないとして、低下の事実はないとの立場をとったが、そうした危惧の声に応える形で二〇〇二年一月、全国規模の学力調査を行い、二〇〇二年一二月、ようやく一部学力低下を認めるに至った。さらに、二〇〇三年八月、本来であれば一〇年は見直さないと学習指導要領を実施二年目にして早くも見直す方針を示した。そしてそれを受けて二〇〇三年一〇月、中央教育審議会は指導要領の一部を見直すことを求める答申を出した。さらに二〇〇四年四月からは、発展的な学習に関連して、教科書に「発展的記述」が登場し、台形の面積の公式が復活するなど、学習指導要領で扱いが制限されている内容を盛り込めるようになった。

こうした一連の動きと低下の事実を示すデータの多さからすると、全国的な学力低下はもはや既成事実として認識しなければならぬだろう。だとすると、沖縄に関して言えば、もともと低学力な状況に加えてさらに、学力低下の波が押し寄せるといふ、いわば「二重の低学力」にさらされているということになる。換言すれば、沖縄は「相対的な学力の低さ」（他の地域に比べて学力が低いという意味での低学力問題）と「絶対的な学力の低さ」（年々学力が下がっていくという意味での学力低下問題）

という二つの学力問題に同時に対処しなければならない状況にあると言え、問題はより深刻である。

加えて言えば、今回の改革により「学力の二極化」が進むであろうことはさまざまところで指摘されている（例えば、荻谷 2001a,b、耳塚他 2002）。完全学校週五日制が導入されたが、それ一つとっても、土曜日に休まない私立と、土曜日に休む公立との間にはこれまで以上の格差が生じることは確実であろう。例えば、もともと学力が低く公立にしか通えない貧困層の子どもは、ますます取り残されていく可能性もある。つまり、全体的に学力が低下するのであるが、それは格差をとめないながらの低下である（下位層の低下の程度が大きく、上位層の低下はそれほどでもない）という点は注意が必要である。この観点から言うと、下位層に位置づけられる沖縄はさらに不利になっていくと言える。

一、本研究の目的とパーソナリティに注目

以上のような背景から、ここでは沖縄の低学力の要因について考察してみたい。ここで沖縄の低学力問題について考察することは、同じく低学力問題を抱えている同和地区の問題を考えることにもつながると思われる。

私は、沖縄と同和地区が学力問題を抱えているという

共通点だけでなく、低学力の要因にも共通部分があるという仮説を持っている（西本 2000）。今津（1994）などによって指摘されるように、同和地区の子どもには「今を生きる」という現在志向的な価値観があるとされている。これは将来のために今を我慢して努力するという価値とは正反対のもので、「今が楽しければよい」とか「先のことはあまり気にしない」といった、現在肯定的な行動様式のことである。そしてこのことが低学力の要因の一つであると言われている（例えば、原田 2003）。

実は、沖縄にも酷似した状況があるように思われる。沖縄には「てーげー」（適当、ほどほど）や「なんくるないさー」（なんとかなるさ）という楽観的な（そしてとても素晴らしい）文化が存在する。しかし、人間性としては確かに素晴らしいのであるが、こと学力問題となるとそうはいかない。こうした考え方、価値観、パーソナリティが学力に対してはマイナスに働く可能性があるのである。沖縄の学力が低い背景の一つには、こうした文化の問題があると私は考えている。

よってここでは、沖縄にはそうした価値観があり、それが低学力の要因になっているかどうかをデータ分析を通して確認したい。具体的には、私が二〇〇〇年に沖縄県と広島県において行った中学生調査により得られたデ

ータを再分析する。その際、沖縄の生徒と広島の生徒のパーソナリティを比較する。パーソナリティ測定尺度としては、近年「世界標準」として注目されているビッグ5（Big Five）を用いる。

二、研究の方法

沖縄県の学力問題を考える際には、他県との比較という視点が欠かせない。よって本研究においては、沖縄県の中学校はもちろん、県外（広島県）の中学校も調査対象とした。具体的には、沖縄県南部（那覇市）に位置するA中学校、沖縄県北部（名護市）に位置するB中学校、広島県広島市に位置するC中学校の計三校である。三校はいずれも公立中学校であり、対象学年は一年生である。各校のサンプル数は、A中学校一五四名（男子七四名、女子八〇名）、B中学校一五七名（男子七九名、女子七八名）、C中学校二六九名（男子二二八名、女子一四一名）、計五八〇名である。

調査は二〇〇〇年十一月に行った。調査は二つの部分からなる。実際の学力を測定するための「学力検査」と、低学力の要因を探るための「質問紙」である。学力検査は教研式・全国標準「診断的学力検査」を用いた。教科は国・数の二教科である。質問紙は「中学生の学校生活

についての調査」と銘打った独自に作成したものを用いた。その中には後ほど詳しくふれるが、学力を規定する要因についてより多角的にとらえるため、家庭環境、パソコンナリティなどを把握する項目が含まれている。また、文化的要因を把握するための項目も含まれている。

なお、分析にはSPSS11.0J[®] Amos4.0[®]を用いた。

三、学力格差の確認

まず、学力格差について確認しておきたい。学力検査の得点(各教科の正答率を合計したもの)を比較するため、三つの学校において分散分析を行った結果、それぞれ、A中学校九五・六点、B中学校七五・三点、C中学校九〇・六点であり、一%水準で有意(**)であった。ただしA中学校—C中学校間には有意な差は見られなかった(n.s.)。

この結果は一見、予想外のようにも思える。概して沖縄の方が得点が低いと言えるのであるが、学校別に見ると、そうとも言い切れない。A中学校の得点が三校中もつとも高いからである。ただ、A中学校は那覇市でもほぼトップに位置する中学校である。一方、C中学校は広島市でも中程度ないしはそれ以下の中学校である。つまり、単純に沖縄と県外の差がなくなったということ在意

味するわけではなく、むしろ、那覇市でトップの学校と広島市で中程度の学校の得点が同程度という事実こそ、沖縄の低学力の現状を表しているとも言える。

それにもまして、より深刻なのは、県内における北部と南部の格差(A—B間の格差)である。私はこれを

「南北問題」と呼んでいるが、県内外の差以上に注目していかねければならない問題であると考えられる(議論が拡散するため、ここではこうした問題についてはこれ以上ふれない)。

表1 学力検査得点の分散分析結果

		度数	平均値	標準偏差	確率
国語正答率	A中学校	149	44.27	12.63	**
	B中学校	156	26.88	9.47	
	C中学校	257	43.40	11.83	
	合計	562	39.04	13.70	
数学正答率	A中学校	153	51.21	18.69	n.s.
	B中学校	155	48.41	17.53	
	C中学校	259	46.85	18.43	
	合計	567	48.45	18.31	
国数合計	A中学校	149	95.63	28.16	**
	B中学校	155	75.33	23.13	
	C中学校	251	90.62	26.80	
	合計	555	87.69	27.35	

この先の分析では、沖繩のA中学校と広島のC中学校の間に有意な学力差がなかったことにむしろ注目したい。学力が同程度ということは、学力を統制したうえでその他の変数の影響をよりクリアに見ることができると考えるからである。よって後の分析ではA中学校とC中学校の比較を中心に行いたい。

四、分析に用いる変数

詳細な分析に入る前にここで改めて本分析に用いる変数についてふれておきたい。なお、質問紙においてはここで挙げる変数以外についてもデータをとっているが、事前に重回帰分析（ステップワイズ法）により、あらかじめ変数を精選している。ここで紹介する変数はしたがって、ある程度学力に対して影響力を持ったものである。

(一) 単親

「単親」とは、父親もしくは母親、あるいは両親がいない生徒であるということの意味している。単親 1 、非単親 0 のダミー変数を与えている。

(二) 兄弟姉妹数

「兄弟姉妹数」とは、生徒自身を含めて、何人の兄弟

姉妹がいるかを示している。分析ではその数値をそのまま用いた。

なお、言うまでもないが、学力との関係で言えば、一般には兄弟姉妹数が増えるほど学力達成は低くなるということが知られている。

(三) 学力観

周知のように「新しい学力観」では、従来の学力ととに関心・意欲・態度といったものも学力として評価しようとしている。しかしながら、再生産論の立場からすると、かえってそのようなものが重視されればされるほど、学力はより階層を反映したものになり、階層間格差はさらに広がるのではないかと、いう危惧もある。

生徒の持つ学力観が階層の影響を強く受け、さらに学力に対しても影響を与えているとすれば、学力を規定する要因として見逃せない変数となりうる。極端に言えば、学力よりも学力観の方が階層をより反映したものとなっている可能性もある。

よってここでは、数学と国語の学力観をとらえる項目を設定した。具体的な項目は以下の通りである。それぞれについて五項目ずつ設定した。Qは問の番号を示す。

【数学の学力観】

Q 1 買い物をするときや、クラスの会計係になったとき、進んで予算を立てたり、細かに収入支出の計算をしたりしようと思う

Q 2 本を読んでいて、その内容についての数の表が出てきたとき、その表をよく調べながら読んでいる

Q 3 数学の問題を、数や式や記号を用いて解くことを、おもしろいと思う図形に関する問題を考えてみることに好きだ

Q 4 図形に関する問題を考えることが好きだ

Q 5 ハイキングに行くときなどに、道のりと歩く速さの関係を考えて、きちんとしたプランを立てて行くようにしている

【国語の学力観】

Q 6 話や話し合いをするとき、正しい言葉づかいで、相手によく分かるように話そうと努めている

Q 7 授業中、先生の話や友達の発表などを聞くとき、その要点をとらえながら聞いて、ノートをとるようにしている

Q 8 いろいろの種類の本に興味を持って読んでいる

Q 9 文章を読んでいて、意味の分からない言葉があったり、また、自分が文章を書くときに、書けない漢字などがあつたりしたとき、進んで辞書で調べている

Q 10 自分から進んで文章を書いたり、日記や手紙を書いたりしている

なお、後の分析(重回帰分析)では「数学の学力観」の方を変数として用いている(ステップワイズ法による分析の結果、多重共線性の問題もあつたのか、「国語の学力観」は除外された)。変数は主成分分析を行った後の主成分得点を用いる。

(四) 家庭の文化

ここではもう一つの階層変数として、家庭における文化的活動を測定したい。家庭環境の一つの変数として「家庭の文化」を加えるべく、因子分析を行い因子を抽出した。家庭の文化の測定項目は、社会学で再生産研究として知られるものを参照して設定した(例えば、Tshida 1993、片岡 2001、片岡他 1998、宮島・藤田他 1991、宮島他 1995)。なお、ここで家庭の文化に注目するのは、それが最近の社会学、特に文化的再生産論に依拠する研究において、家庭環境をとらえるうえでの重要なキーワードとなっているからである。実際に因子分析を行った結果が表3である。

ちなみに、数々の文化的再生産論に依拠した研究では、

表3) 家庭の文化の因子分析(バリマックス回転)

	因子1 正統文化志向	因子2 大衆文化志向
美術館や博物館に行く	0.696	0.021
演劇をみに行く	0.609	0.024
クラシック音楽のコンサートに行く	0.605	-0.026
フランス料理の店で食事をする	0.600	0.115
ピアノをひく	0.543	-0.042
旅行に行く	0.513	0.201
映画をみに行く	0.496	0.259
お菓子(ケーキ、クッキーなど)やパンを作る	0.485	0.177
パソコンを使う	0.414	0.045
テレビで野球をみる	0.061	0.557
スポーツ新聞を読む	0.094	0.522
テレビのニュース番組をみる	0.118	0.435
テレビの歌番組をみる	0.026	0.368
ゴルフをする	0.162	0.314
写真雑誌(フォーカス、フライデーなど)を読む	0.170	0.276
テレビドラマをみる	0.041	0.263
マージャンをする	0.045	0.235
カラオケに行く	0.145	0.221
パチンコに行く	-0.099	0.216
あみ物やししゅうをする	0.329	0.181
日曜大工(本ばこや犬小屋を作ること)をする	0.327	0.121
テニスをする	0.278	0.109
固有値	4.222	1.971
回転後の負荷量平方和(%)	14.547	6.904
回転後の負荷量平方和	14.547	21.451

家庭の持つ文化を測定する際、具体的には「美術館に行く」「博物館に行く」「クラシックのコンサートに行く」などの項目をよく用いる。こうした項目からなる文化を「正統文化」と呼び、文化的に高度であるとされている。一方、「野球をみる」「スポーツ新聞を読む」などの項目

からなる文化は「大衆文化」と呼ばれる。ここではそうしたことをふまえて、因子を命名した。因子1は、「美術館や博物館に行く」「演劇をみに行く」「クラシック音楽のコンサートに行く」などの項目からなっている。そこでこの因子を「正統文化志向」と名付け

注) 因子負荷量は、絶対値が.350以上のものを採用した。

た。一方、因子2は、「大衆文化志向」と名付けた。

なお、後ほどの重回帰分析では「正統文化志向」の因子得点を変数として用いる。

(五) パーソナリティ

沖縄の学力問題をとらえようとする際、ここでもっとも注目したいのがパーソナリティである。ここではパーソナリティを測定する尺度として、近年心理学の分野で世界標準として注目されている「Big Five」(5大次元尺度)を用いたい。世界標準と銘打ったいわゆる性格の5因子モデルは、水間(2000)の指摘するように、幾多の議論と実証的研究および語彙研究を経、広く支持されるに至っている。他研究との比較を可能にするためにも、ここでもそれを用いることにする。

質問紙では5因子それぞれについて六項目、計三〇項目を設定した。項目は中学生にも比較的理解可能で、なおかつNEO-FFIにも含まれているものを選択した(ちなみにNEO-PI-Rは二四〇項目からなっている。NEO-FFIはその縮小版であり、本調査ではさらに項目を厳選した)。具体的には次に示す。Qは問の番号、Rはリバーズ項目を示す。

なお、後の重回帰分析では、これらの因子の因子得点

を用いる(結果的にはステップワイズ法により変数を減らしている)ので、用いる因子は「情動性」「統制性」の二つである)。

①情動性

この因子は心配性かほかかかの程度を把握する項目からとらえられるものである。

【不安】

Q 1 私は心配性ではない (R)

【敵意】

Q 6 私はちよつとやそつとのことでは怒らない (R)

【抑うつ】

Q 11 悲しくなったり、落ち込んだりすることはほとんどない (R)

【自意識】

Q 16 穴があつたら入りたいと思うほど、恥ずかしいことがたまにある

【衝動性】

Q 21 したくてたまらないことをがまんするのは難しい

【傷つきやすさ】

Q 26 ストレスが多いと、自分が「めちやくちや」に

なるように感じることもある

②外向性

この因子は積極的か控えめ目の程度を把握する項目からとらえられるものである。

【温かさ】

Q 2 人と話すのがとても楽しい

【群居性】

Q 7 おおぜいの人と一緒にいるのが好きだ

【断行性】

Q 12 会話では自分がしゃべっていることが多い

【活動性】

Q 17 元気があふれて、じっとしてられないことがよくある

【刺激希求性】

Q 22 活気のあるところにいるのが好きだ

【よい感情】

Q 27 自分は元気ではつらつとした人間だ

③遊戯性

この因子は好奇心旺盛か現実志向かの程度を把握する項目からとらえられるものである。

【空想】

Q 3 空想にふけて時間を無駄にするのは好きでは

ない (R)

【審美性】

Q 8 芸術作品や自然の中でみつけた形に興味をひかれる

【感情】

Q 13 自分がどう感じるかを大切にしている

【行為】

Q 18 新しい、珍しい食べ物を試してみることがよくある

【アイデア】

Q 23 パズルや問題を解くのが楽しい

【価値】

Q 28 道徳的な判断は、昔からある基準に基づくべきだ (R)

④愛着性

この因子は温かいかクールかの程度を把握する項目からとらえられるものである。

【信頼】

Q 4 私は最初から人を信用する

【実直さ】

Q 9 たとえだまそうと思っても、人はだますことができない

【利他性】

Q 14 私は誰にでも好意を持って接しようとする

【応諾】

Q 19 人と張り合うよりも、協力し合う方が好きだ

【慎重深さ】

Q 24 自分をとても高く評価している (R)

【優しさ】

Q 29 自分より不運な人に同情する

⑤統制性

この因子は几帳面か大まかかの程度を把握する項目からとらえられるものである。

【コンピテンス】

Q 5 正しい判断ができることが私の自慢だ

【秩序】

Q 10 持ち物をきちんとし、きれいにしている

【良心性】

Q 15 割り当てられた物事を、すべてきちんとやるよう努めている

【達成追求】

Q 20 自分の目標を達成するように頑張る

【自己鍛錬】

Q 25 身を入れて物事をやり始めるまでに時間がかかる

る (R)

【慎重さ】

Q 30 結果をよく考えてから行動する

四、結果

(一) 低学力の要因分析

次に、全サンプルを使用して重回帰分析することにより、低学力の要因を探ってみた。その結果が次の表である。なお、*は1%水準で有意であることを示す。

学力 (国数合計) に大きな影響を与えている順に独立変数を見ていくと、まず、パーソナリティの「統制性」(几帳面な

表 4 学力の規定要因 (重回帰分析: ステップワイズ法) a

	非標準化係数		標準化係数	t	確率
	B	標準誤差	β		
(定数)	101.264	3.574		28.366	**
統 制 性	6.382	1.630	.187	3.914	**
正統文化志向	3.919	1.379	.127	2.843	**
兄弟姉妹数	-3.978	1.206	-.138	-3.299	**
情動性(-)	-5.231	1.578	-.138	-3.314	**
学力観(数学)	4.318	1.276	.158	3.383	**
単 親	-8.529	2.947	-.122	-2.849	**

a. 従属変数: 国数合計. R = .431

性格特性)が正の影響を与えている。几帳面な性格特性を持つ生徒の学力は高くなると解釈できる。同様に見ていくと、「学力観」も正の影響を与えている。学力に関して高い関心を持っている生徒ほど学力は高くなるということである。

兄弟姉妹数は負の影響を与えている。これは兄弟姉妹数が増えるほど学力に対してはマイナスになると解釈できる。兄弟が増えれば増えるほど、親の一人あたりの教育投資額が減少するなど、学力達成に対して不利になるということとは知られている。

「情動性(一)」は負の影響を与えているが、「情動性」因子は逆転しているので、慎重で神経質な性格を持った生徒の学力は高くなると解釈できる。

家庭の文化である「正統文化志向」は、プラスの影響を与えており、数々の再生産論研究の結果と一致する(例えば、宮島他 2000、西本 1998)。

単親とは父親もしくは母親がいないことを示すが、この変数もマイナスの影響を与えている。

ちなみに、「単親」「兄弟姉妹数」については、沖縄の離婚率は全国一位であるし、出生率も全国一位であることから、沖縄ということに焦点をあてた場合、これらが特有の沖縄の低学力を規定する要因であることは充分考

えられる。

(二) 沖縄の特徴

パソナリテイについては、さらに沖縄という視点に立って分析を進めてみたい。その際、ほぼ学力が等しい沖縄のA中学校と広島のC中学校の比較を行いたい。そこで、先ほどの重回帰分析の中で、パソナリテイ変数で有意に影響を与えた「統制性」と「情動性(二)」の得点比較を行ってみたい。なお、「情動性(一)」は因子得点を用いて分析すると解釈が逆になってしまう。そこで、混乱を避けるため、統計的にはあまり望ましくはないが、4件法によって得られた得点そのものを用いることにする。したがって「統制性」「情動性」各六項目の四点満点なので、それぞれ二四点満点ということになる。得点が高くなるほど、その傾向が強くなると解釈できる。

図1は、「統制性」「情動性」の得点を二校で比較したものである。視覚的に差が明らかになりやすいようにグラフで示している。

それぞれの得点は、「統制性」でA中学校で一五・五六、C中学校で一五・八二、「情動性」でそれぞれ一二・四三、一七・八二であり、t検定の結果、「統制性」に関しては有意な差は見られなかったが、「情動性」に関しては一%

水準で有意な差が
みられた。

結果からC中学
校（広島）の方が
A中学校（沖縄）
よりも、「情動性」
得点が高いと言え
る。つまり、概し
て言うところ、沖縄の
生徒の方が、気楽
な性格傾向（例え
ば、おらかでは
がらか、気分には波がない、脳天気など）が強いと言える
のである。

この結果を表4の重回帰分析の結果と併せて解釈して
みたい。結論から言えば、沖縄の生徒の持っている比較
的ポジティブな性格特性のために、学力が押さえられて
いる可能性を示唆する結果であると思われる。

先ほども述べたように、A中学校とC中学校は同程度
の学力である。一方、「情動性」に注目すると、沖縄の方
が低くなっている。この因子は学力に対してはプラスの影
響を与えているものであるから、このことによって沖縄

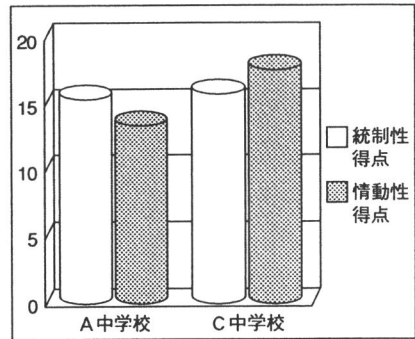


図1 パーソナリティの得点の比較

の学力が低められている可能性がある。

俗な言い方であるが、情動的でない方が望ましいパー
ソナリティであると一般には言われる（逆に情動的であ
るといふことは、何事にも慎重であるが、神経質で落ち
込みやすい、情緒不安定といった傾向も見られる）。まさ
に沖縄がそうした状況である。ただ、沖縄の「情動性」
が弱いという事実は、学力に対してはマイナスの影響し
か与えていない。もし沖縄のパーソナリティがもっと県
外のものにもっと近いならば、学力はもっと高くなっ
ているのではないだろうか。

おわりに

沖縄の県民性というものがよく指摘される。「ねばり強
さに欠ける」「ルーズ」「のんびり」「連帯意識が強い」
「開放的」「県人意識・郷土意識が強い」「相互扶助」（例
えば、NHK放送世論調査所 一九九七、ハイパープレ
ス 二〇〇〇）といったことは、沖縄県の県民性を表す
ときによく用いられる表現である。そうした一般的に言
われていることと、学力の低さを短絡的に結びつける
ことはできないが、本研究においてパーソナリティ項目
における差が確認されたのもまた事実である。このよう
な県民性という概念は、生まれ育った地域の文化がパー

ソナリティ形成に影響を及ぼしているという考え方である。

では具体的に、「沖繩の文化」とはどのようなようにとらえることができるだろうか。それは一言で言えば、「相互扶助」の文化と言えるであろう。競争心が育ちにくい「親和性の文化」と言ってもよいであろう。沖繩に今も残る「ゆいまーる⁽¹⁾」の精神や「もあい⁽²⁾」といった習慣も、そのよい例であろう。

それではなぜ沖繩には相互扶助の精神や親和性の文化が根付いたのだろうか。私はその問題を考えるとき、同和問題と通じるところがあるにとらえている（西本 2000）。

今津・浜野（一九九一）は、同和地区の低学力の要因を、地区の持つ「親和性」の文化にあるにとらえている。そしてその文化は次のような背景から生まれたと説明している。厳しい差別の中で生き抜くためには、人々は互いを支え合い、助け合わなければならなかった。そこで生まれたのが処世の術としての「親和性」の文化である。そしてそれは学校の持つ競争主義的、業績主義的文化とは併存することが難しい。その結果、地区の子どもは学校不適応になりやすく、学力も伸びない。文化的不連続説（例えば、Bemstein 1977）に依拠した指摘である。

沖繩にも助け合わなければ生きていけないという、酷

似した状況があったように思われる。質は大きく異なるが沖繩の歴史もまた厳しいものであった。台風や干ばつによって作物も育たなかった食糧難の歴史。薩摩、幕府、アメリカと引き継がれた長い占領の歴史。その中で培われたのが互いに協力しようとする「親和性」の文化ではなかっただろうか。なんとたくましく、また悲しい心理であろうか。

最初に挙げた「てーげー」や「なんくるないさー」といった考え方も、苦しみを乗り切るための処世の術と言えるだろう。「もあい」や「ゆいまーる」という助け合いの精神は今も生きている。そう言えば、沖繩は失業率全国一位であるにもかかわらずホームレスが見あたらない。それも、助けてくれる親戚などが存在するからであろう。これまで沖繩は低学力問題を放置してきたわけではない。この三〇年間、「学力向上対策」（いわゆる「学対」）を県として進めてきた。そしてその際、合い言葉として出てくるのが「本土並みの学力」である。本土の学力に追いつき追いこせという意味である。

不平等問題の観点からすれば、それはそれで望ましいことであるし、県の施策としては悪くはない。むしろ、その取り組みには頭が下がる思いである。もし「学対」を行っていないければ、現状よりもはるかに格差が広がっ

たまたまだったことは容易に想像がつく。

ただし、注意しなければならないのは、学力向上を指すあまり、かえって沖繩の良さが損なわれることである。学校文化への迎合、競争主義的価値への同化、それはすなわち、沖繩が育んできた「相互扶助の文化」を失うことにつながるのではないだろうか。そうなれば本末転倒である。

最初に述べたように、今、文科省の方針が刻々と変わっているのと同時に、学力のとらえ方自体も刻々と変わっている。「新しい学力観」「生きる力」「確かな学力」等々、そうした標語に惑わされることなく、沖繩の文化を守るの方が、本当の意味での学力獲得の最短距離である可能性もある。

注

(1) 「ゆいまーる」は「結(ゆ)い」を意味する沖繩地方の方言。「ゆい」は結い〓結合〓共同〓協働、「まーる」(回る)は順番のこと。すなわち「ゆいまーる」は労働交換を意味する。ムラという共同体社会で農業を営んできたアジア社会では、耕地、水利、生産活動などで相互扶助を不可欠な要件としているため、本土の「結い」、韓国のプマシなどのように、日本本土はもと

より中国、韓国などでも労働交換が発達している。沖繩の「ゆいまーる」は、農作業だけに限定されていないところが特徴的であることから、これを広い意味の地域協働の仕組みととらえ、このシステムが地域における参画と協働を支援するメディアとして育つことを夢見て「ゆいまーる」と名付けられた。「ゆいまーる」の根底には、「相互扶助」と「平等の原則」がある。誰もが互いに信頼し合い、心から支えあえる地域社会の実現に向けて、ひとりひとりがちいさな力を出し合い、連携しあって歩んでいきたいと考えられる(参考『オキナワなんでも事典』)。

(2) 模合(もあい)は、沖繩でとてもポピュラーな金銭的相互扶助システム。メンバーが定期的に集まって一定の金額を出し合い、その集まったお金を順番にとるという仕組み。お金をとる人を入札で決めるなど、模合(もあい)ごとにいろいろ取り決めがある。本土でいう無尽講、頼母子講。

集めた資金は、家の新築や子どもの進学に、事業資金などに利用されている。現在は、一回に出す金額も一万円とか二万円程度で、親戚同士や友達のコミュニケーションの場として気軽に楽しむも多い(参考『オキナワなんでも事典』)。

参考文献

- Bernstein, B. 1977, *Class, Code and Control, Volume 3*,
Routledge & Kegan Paul.
- Bourdieu, P. 1979, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオンⅠ、
Ⅱ』藤原書店。
- NHK放送世論調査所編 一九九七、「日本人の県民性一
九九九年版」大空社。
- ハイパープレス 二〇〇〇、「県民性」やっぱり！大事
典』青春出版社。
- 池沢 夏樹編 二〇〇三、「オキナワなんでも事典」新潮
文庫。
- 今津孝次郎 一九九四、「学力・学校文化・地域文化」
『解放教育』第三〇号、明治図書、四五―五二頁。
- 今津孝次郎・浜野隆 一九九一、「部落」のサブカルチ
ャーと学校文化』『名古屋大学教育学部紀要』第三八
巻、四九一―四三二頁。
- Ishida, H. 1993, *Social mobility in contemporary Japan*,
Macmillan.
- 原田 彰編 二〇〇三、「学力問題へのアプローチ―マイ
ノリティと階層の視点から―」多賀出版。
- 荻谷 剛彦 二〇〇一a、「学歴社会」という神話 戦後
教育を読み解く』日本放送協会。
- 荻谷 剛彦 二〇〇一b、「階層化日本と教育危機―不平
等再生産から意欲格差社会へ」有信堂。
- 片岡 栄美 二〇〇一、「教育達成過程における家族の教
育戦略―文化資本効果と学校外教育投資効果のジャン
グラー差を中心に―」『教育学研究』第六八巻、第三号、
二五九―二七三頁。
- 片岡 栄美編 一九九八、「文化と社会階層」一九九五年
SSM調査研究会。
- 耳塚 寛明・金子真理子・諸田 裕子・山田 哲也 二
〇〇二、「先鋭化する学力の二極分化」『論座』十一月
号、二二―二七頁。
- 宮島 喬・藤田英典編 一九九一、「文化と社会―差異
化・構造化・再生産」有信堂。
- 宮島 喬編 一九九五、「文化の社会学―実践と再生産の
メカニズム」有信堂。
- 宮島 喬編 二〇〇〇、「講座社会学 七 文化」東京大
学出版会。
- 水間 玲子 二〇〇〇、「パソナリティに関する研究の
動向」『教育心理学年報』四〇、八一―九〇。
- 西本 裕輝 一九九八、「学級におけるインフォーマル地
位と家庭環境の関連性に関する実証的研究」日本グ

ープ・ダイナミックス学会編「実験社会心理学研究」
第三八巻、第一号、一―一六頁。

西本 裕輝 二〇〇〇、「沖縄の学力問題への再生産論的
アプローチ」『琉球大学教育学部紀要』第五四集、三五
九―三七二頁。

西村 和雄編 二〇〇一、「学力低下が国を滅ぼす」日本
経済新聞社。

岡部 恒治・戸瀬 信之・西村 和雄編 一九九九、「分
数ができない大学生―21世紀の日本が危ない」東洋経
済新報社。

沖縄市教育委員会 一九九七、「学力向上のあゆみ」。

沖縄県対米請求権事業協会 二〇〇一、「100の指標か
らみた沖縄県のすがた（対米協研究シリーズ6）」。

〈付記〉

本研究の実施にあたっては科学研究費補助金（平成一
二―一三年度、奨励研究A、課題番号：12710153、平成
一四―一五年度、若手研究B、課題番号：14710193）の
交付を受けている。

